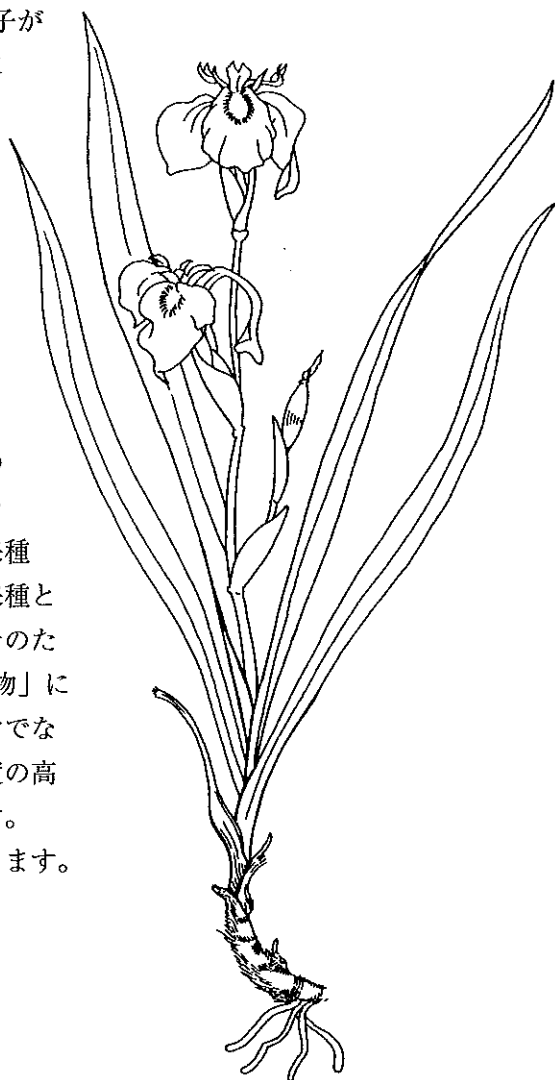


## 13. キショウブ

キショウブ (*Iris pseudacorus*) はヨーロッパから中近東地域を原産地とするアヤメ科の多年生草本です。湿地に生育し、地下に横走する太い根茎を伸ばして、その先から長さ 1.5 m ほどの濃緑色・無毛で線形の葉を多数叢生そうせいします。春から夏にかけて葉とほぼ同じ高さの花茎を伸ばし直径約 8 cm の黄色い花を数個咲かせます。花期は長く、花後に三角柱状の果実を付けます。熟した果実は三つに割れ、中から直径 1 cm ほどの種子が散布されます。種子は軽く、水に浮かび、水流に乗って分布を広げます。

日本には明治末に導入され、日本産のハナショウブにはない純黄色の花が好まれて全国各地で栽培されました。また近年ではピオトープなど「自然復元」の素材として積極的に導入される場合もあります。湿地を好むキショウブですが、かなりの乾燥にも耐えるなど性質が強靱きょうじんなため、現在では湖や川岸、沼地などに広く逸出し、野生化しています。その結果、増えすぎたキショウブは同じような環境を好む絶滅危惧種のカキツバタをはじめとした在来種の生息を圧迫するようになりました。また、在来種との交雑による遺伝的汚染も危惧されています。そのため 2009 年には外来生物法により「要注意外来生物」に指定されました。キショウブの野生化は日本だけでなく世界各地で報告され、北米などでは水路や湿度の高い畑地の雑草となって問題を引き起こしています。

キショウブは本園では湿生園で見ることができます。



キショウブ (*Iris pseudacorus*)

14. シンジュ

ニガキ科のシンジュ (*Ailanthus altissima*) は中国原産の落葉広葉樹で、中国では「樗」と書きます。丈夫で虫害・乾燥・煙害に強く、成長も速いため、短期間でかなりの大きさになります。しかし材木としては柔らかすぎ、また薪としても利用価値が低い「樗」は役立たずのたもととして昔から使われてきました。役に立たない人のことを「樗櫟<sup>ちよれき</sup>之材」(「櫟」はクヌギのこと)と呼ぶ四字熟語もシンジュからとられたものです。

故郷の中国では酷評されていたシンジュですが、ヨーロッパでは街路樹として利用され、19世紀半ばのウィーンには立派な街路樹がありました。日本に入って来たのは明治初年で、ウィーンの街路樹を見て感心した日本の農学者津田仙氏が苗木を持ち帰ったといわれています。北海道にはハリエンジュと同時期、明治14年に導入されました。シンジュは雌雄異株で、葉は互生し、大きな羽状複葉を持ちます。6～7月ごろ、枝先から出る円錐花序に、緑白色で直径7～8ミリの花を多数付けます。

属名の *Ailanthus* (アイランスス) は、インドネシア東部のモルッカ諸島に分布するモルッカシンジュ (*A. moluccana* が現地語で「天の木」を意味する「アイラント」と呼ばれていたことに由来します。「天の木」が英国では Tree of Heaven と訳され、これがドイツでは Götterbaum と命名されました。前者は天国の樹、後者は神の樹の意味で、日本語の

「シンジュ (神樹)」はドイツ名の翻訳です。しかし本来「アイラント」は「天にもとどく高い木」という意味で、「神の木」という意味はありません。日本では別名「ニワウルシ」と呼ばれます。葉の姿がウルシに似ていることから命名されたと思われますが、ウルシと違ってかぶれるようなことはありません。

現在では日本各地で野生化し、札幌の街中でもあちこちに若い木が生えているのが見られます。



シンジュ (*Ailanthus altissima*)

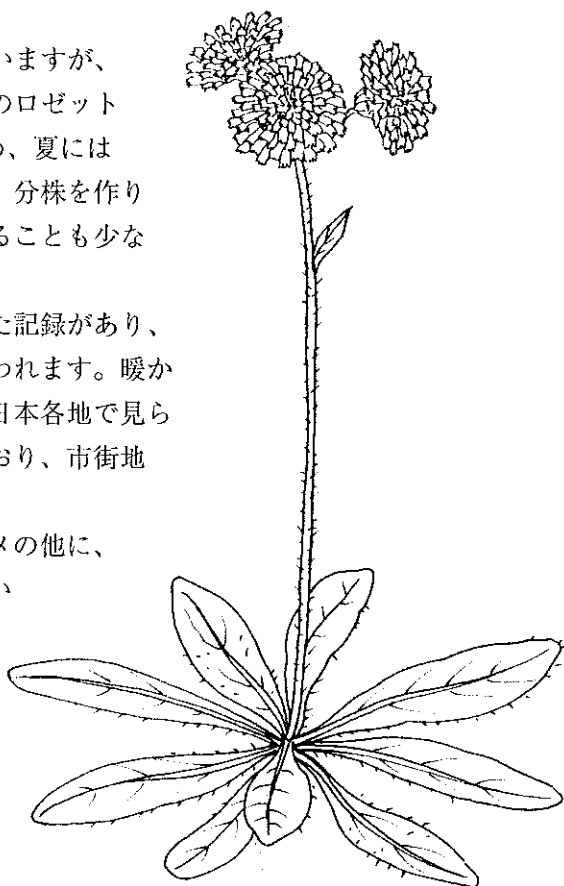
## 15. コウリントンポポ

コウリントンポポ (*Hieracium aurantiacum*) はヨーロッパ中部から北部が原産地で、現在は北半球の温帯に広く帰化しているキク科の多年生草本です。コウリントンポポの仲間はヨーロッパを中心に約 1000 種があり、属名はギリシア語の hierax (鷹) に由来しています。これはタカが視力を高めるためにこの植物の汁を飲んだという伝説に基づいているためで、コウリントンポポはイギリスでは Hawkweed (タカの草) といいます。一方、アメリカでは Devil's Brush (悪魔の絵筆) とよばれます。もともとアメリカに自生しないコウリントンポポは、その花色の美しさから導入当初には Venus' Brush (美の女神ビーナスの絵筆) と呼ばれていましたが、その繁殖力の強さから雑草化し厄介者扱いされるようになったため、ビーナスから悪魔へと呼び方が変化したようです。

コウリントンポポはタンポポに似た姿をしていますが、タンポポとは属が異なります。春には長楕円形のロゼット葉の中心から高さ 30cm ほどの花茎を伸ばし始め、夏には暗紅色の花を咲かせます。地下に走出枝を出し、分株を作りマット状に群生するため一面がこの花に覆われることも少なくありません。

日本には明治の中頃に観賞用として導入された記録があり、観賞用に栽培されたものからの逸出も多いと思われます。暖かい地域ではあまり見られませんが、現在では東日本各地で見られます。特に北海道では広く帰化が認められており、市街地や草地では雑草化しています。

なお遺伝学の祖メンデルは有名なエンドウマメの他に、コウリントンポポを実験材料とした研究もしました。「メンデルの法則」が成り立たない植物だと発表されたそうですが、これはコウリントンポポがタンポポと同様に無性的に種子を作ることをメンデルが知らなかったためだそうです。



コウリントンポポ (*Hieracium aurantiacum*)

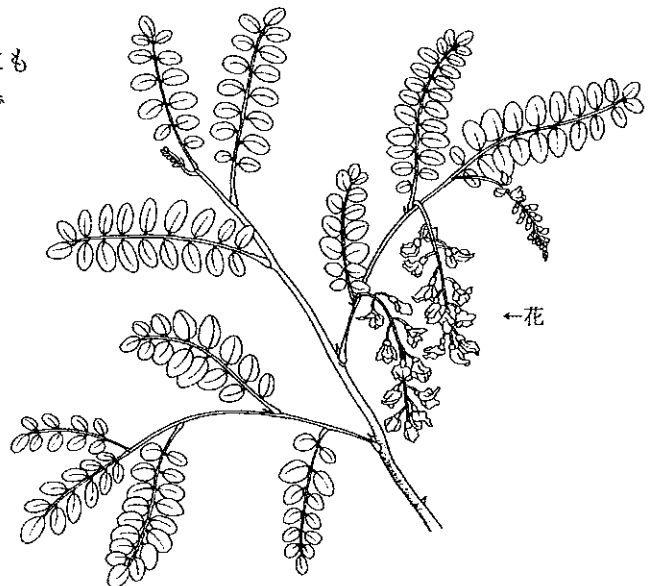
## 16. ハリエンジュ (ニセアカシア)

ハリエンジュ (*Robinia pseudoacacia*) はニセアカシアという別名で呼ばれることが多いマメ科の落葉高木です。原産地は北米で、初夏に白い花を房状に咲かせます。花の蜜が豊富で、養蜂目的で植樹されたという歴史もあります。中国では花房をフライにして食べるほか、複葉の葉は家畜の飼料になります。材は硬く、枕木、杭、鉱山用の坑木等に使用され、吸水性が低いいためオールやスキーにも適しています。また、虫害・乾燥に強く、成長も速いことから街路樹に使われました。

ニセアカシアが日本に導入されたのは明治の初め頃です。東京の日比谷公園に植えられ、当時の農業雑誌で「明石屋樹」と紹介されました。明治十四年に苗が札幌へ運ばれ、育成された後、札幌中心部の街路樹として植えられて市民に親しまれることとなりました。札幌中心部の北一条通りの並木は北原白秋作詞の童謡「この道」で「あかしあの花が咲いてる」と歌われ、誰もが知る樹となりました。

この歌のようにしばしばニセアカシアはアカシアとも呼ばれますが、アカシアとは別の植物です。同じマメ科ではありますがアカシアは *Acacia* 属の一種で、温帯から熱帯にかけて分布し、北海道では育ちません。ノスタルジックに語られることの多い旧満州国のアカシア並木はニセアカシアですし、アカシアハニーと呼ばれる蜂蜜もアカシアではなくニセアカシアの花の蜜を使用しています。

このように利用価値が高く、また、歌にもなって広く親しまれているニセアカシアですが、いったん人の管理を離れると猛烈な勢いで増えます。風による種子の散布の他、一本の木が放射状に根を伸ばし、そこから幹を生やすため群落を形成することもあります。材が硬く鋭いトゲがあるため、伐採も困難です。外来種であるニセアカシアの繁茂は元々の生態系を大きく破壊しかねません。そのため2000年には特定外来種に指定され、駆除の対象となっています。



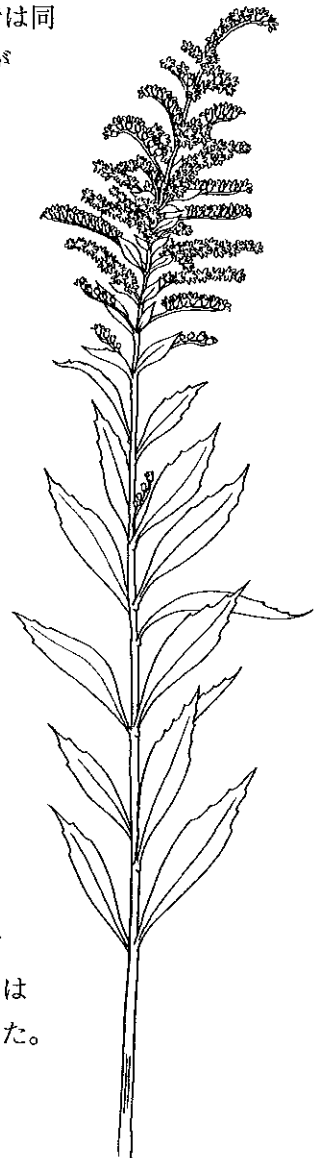
ハリエンジュ (*Robinia pseudoacacia*)

## 17. セイタカアワダチソウ

アワダチソウの仲間のセイタカアワダチソウ (*Solidago altissima*) は北アメリカ原産でキク科の多年生草本です。地中を横走する太い根茎から直立する茎を伸ばし、晩夏から秋にかけて多数の黄色い花を密に付けます。日本各地に帰化していますが、北海道では同じアワダチソウの仲間のオオアワダチソウ (*Solidago gigantea*) の方が多く見られます。よく似た姿をしていますが、セイタカアワダチソウは背が高く、時に4mに達するのに対し、オオアワダチソウは50～150cmと低く、また、花期が早い(7～8月)ので見分けることができます。

セイタカアワダチソウが日本に輸入されたのは明治時代で、観賞用だったといわれますが、野生化して日本各地に分布を広げたのは第二次大戦後です。九州ではヘイザンソウ、ベトナムソウなどの別名もあり、炭坑の相次ぐ閉鎖や、ベトナム戦争といった戦後日本の歩みと共に分布を広げていった様子がうかがえます。また花粉症患者が増加した時代とも重なったため、花粉症の原因であると長らく考えられてきましたが、虫媒花であるセイタカアワダチソウの花粉は呼吸器に吸い込まれにくく、現在では花粉症の原因とは考えないのが定説です。

セイタカアワダチソウの葉や茎にはポリアセチレン化合物という化学物質が含まれており、これが土中に放出されると他の植物の発芽や生育を阻害します。そのためセイタカアワダチソウは競争相手を駆逐して自分の生息域を広げることが出来ます。空き地や線路脇などにセイタカアワダチソウの大群落が出来るのはこのためです。しかし土中のポリアセチレン化合物濃度が高くなりすぎると、セイタカアワダチソウ自身の発芽も阻害され、やがてススキなどが侵入してきます。そのためセイタカアワダチソウの独占状態は長くは続かず、現在ではかつてのような大群落はあまり見られなくなりました。

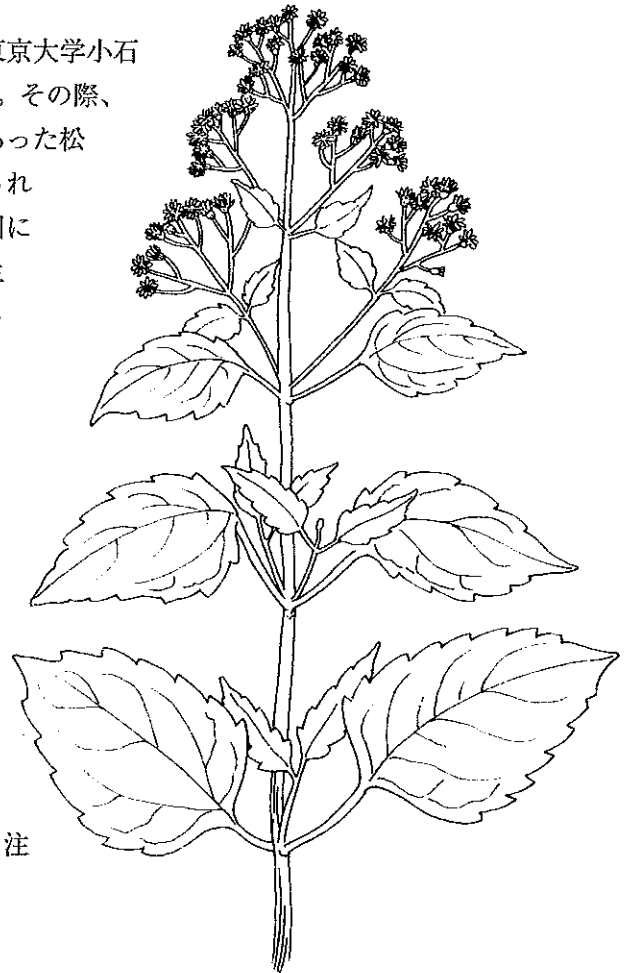
セイタカアワダチソウ (*Solidago altissima*)

## 18. マルバフジバカマ

マルバフジバカマ (*Eupatorium rugosum*) は北アメリカ原産で、キク科の多年生草本です。太い根茎から数本の茎を直立し、高さは1mほどになります。茎は上部に毛があり、よく分岐します。葉は卵形で鋭鋸歯<sup>えいぎょし</sup>があってややザラつき、短い柄<sup>へら</sup>があって対生します。草姿が同属のフジバカマ (*Eupatorium fortunei*) に似ていますが、フジバカマの葉は2~3裂するのに対し、本種の葉は裂けることが無く、そのため「丸葉フジバカマ」と命名されました。晩夏から秋にかけて直径5mmほどの白色の筒状花からなる頭状花<sup>とうじょうか</sup>を多数付けます。瘦果<sup>せうか</sup>には白色の冠毛<sup>かんもう</sup>がありタンポポのように風に乗って散布されます。

日本に導入されたのは明治時代中期で、東京大学小石川植物園では1896年の栽培記録があります。その際、東京帝国大学植物学教室の第2代目教授であった松村任三先生に「マルバフジバカマ」と命名されました。その後、神奈川県箱根町の強羅公園<sup>こゝら</sup>に贈られました。これが逸出したらしく、野生化したマルバフジバカマが箱根の山で目撃された1916年の記録が残っています。他の花が少ない秋頃に花を咲かせるため、養蜂業者が蜜源として利用していたという話もあります。

野生化したマルバフジバカマは現在では北海道から近畿地方にかけて分布を広げていますが、林縁部など比較的明るい場所を好み市街地などでまれにみられる程度で、大規模な群落をつくることはあまりありません。しかし、開花期が長く、刈り払われた花でも種子を付けることがあるため一度繁茂すると根絶は困難で、注意しなければいけない帰化植物の一つです。



マルバフジバカマ (*Eupatorium rugosum*)